

# 『イーリアス』におけるトロイア方援軍の言葉

## ——小アジア沿岸の旅から——

細井敦子

『イーリアス』第2巻の末尾には、アカイア勢の船のカatalogにつづいてトロイア方のリストがあり(2.816–877)、そこにはかれらの出身地として、トロイアを先頭に、その西北はトラキア、北東は黒海沿岸、南東は地中海沿岸まで、古代アナトリアの16ほどの地方があげられている<sup>\*1</sup>。2011年秋に、これらの地方のうちエーゲ海と地中海に沿う小アジア地方を、トロイアからシデ(Side)まで訪ねる機会を得て、リュキア語、カリア語、シデ語などの碑文をいくつか実見することができた。ここではとくに、『イーリアス』の重要人物の一人であるサルペードーンの領地リュキアに残る紀元前5–4世紀の碑文を中心に、アナトリア諸語については初心者という立場から調べたことを報告して、ホメーロスが「トロイア方援軍」に関わる言葉の状況を(歴史事実としてどうであったかというよりも)どのようなものとして提示しているかを考える手がかりとしたい<sup>\*2</sup>。

### 1.1 「印欧アナトリア語派」のなかのリュキア語

アナトリア語とは、前二千年代からヘレニズム期までの、アナトリア地方(エーゲ海および地中海沿岸からユーフラテス河辺りまでの、ほぼ現在のトルコ共和国にあたる広い地域)に存在した諸言語の総称であって、印欧語系と非印欧語系の両方をふくむ。印欧語系諸語は「印欧アナトリア語派」と「印欧バルカン語派」に分けられる。前者のなかでもっとも古い文字史料(楔形文字)を大量に残しているのは、前14–13世紀を最盛期としたヒッタイト語(Hittite)で、1915年から1917年にかけてのフロズニー(B. Hrozný)による解読で名詞と動詞の形態法など文法構造から印欧語であることが判明し、文法体系の再構成も進んで、他のアナトリア諸語の解明に貢献している。語彙の点では、「印欧アナト

<sup>\*1</sup> *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia* [以下 *Oxf. Hbk* と略記] Chap. 2, 15–33) は、ホメーロスおよびヘーロドトスにみえるアナトリア関係の記述を明快にまとめて、参照文献リストとともに提示している(G. McMahon 執筆)。

<sup>\*2</sup> なお印欧アナトリア語派全般についての記述は、本稿末にあげた諸文献をもとにした概略である。

リア語派」は他の印欧諸語との共通点がほとんどなく、印欧語系のなかでも特異な位置をしめており、この特異性は、最も基本的な語彙である親族名称において顕著であるとされる。「印欧バルカン語派」は前 1200 年頃におそらくバルカン半島から入って、かつてのヒッタイト領を占拠した人々の言語と考えられ、アナトリアの古い印欧語である前記「印欧アナトリア語派」とは性格を異にしている。本稿筆者の実見した碑文の言語であるリュキア語 (Lycian)、カリア語 (Carian)、シデ語 (Sidetic) などは、楔形文字のヒッタイト語やパラ語 (Palaic)、楔形文字ルウィー語 (cuneiform Luwian)<sup>\*3</sup> などよりも新しく、前 8 世紀頃から小アジア西南部に広がったもの。フェニキア・ギリシア文字系の言語史料が残されているが、量的にも、また史料が属している期間の長さの点でもヒッタイト史料には遠く及ばない<sup>\*4</sup>。

今回調べたリュキア語については、リュキアという地方のことは“Lukka”の形でヒッタイト文書にも記録されているので、その頃にはこの地方に人が住んでいたことは確かであると考えられるが<sup>\*5</sup>、現存のリュキア語文字史料は古くても前 7-6 世紀頃、それもなく僅かな痕跡にしか遡ることができず、大半は、キュロス大王の臣下であったハルパゴスがリュキアの町クサントスを占領した前 540 年頃からアレクサンドロス大王の到来までの期間のものである。その後は、330 年以降リュキア語の文字史料は著しく減少し、けっきょくギリシア語に取って代わられた。リュキア語そのものが、中世写本へと伝承される文献史料を残すことなく、消滅したのである。したがって、リュキア語の史料は、大小の石碑に刻まれ、あるいは壺に記された文字の形でしか残っていないわけで、その期間も二百年足らずという短いものである。これらの史料をなんらかの形で『イーリアス』の理解に役立てようとするとき、残された文字史料と、ホメーロスが提示するトロイア方援軍の兵士たち——その大半は文字を残さなかった人々であると考えられる——が話していたであろう言葉との間には、当然のことながら大きな隔たりが存在しうることも忘れてはならないであろう。1 例をあげれば、これまでの史料から再構成されるリュキア語文法の動詞活用には 2 人称が欠けているが、リュキア語の話し手たちが 2 人称を使わなかったとは考えられない、ということがある。このような制約はあるが、19 世紀以来の考古学・言語学研究的蓄積は、この言語の文法構造の骨格と文字の音価の概要とを明らかにしており、語彙についても近年の発掘の成果をふまえて解明が進んでいる。こうした状況は、程度の差は

<sup>\*3</sup> 聖刻文字ルウィー語 (hieroglyphic Luwian) のほうはより新しく、リュキア語とのつながりがとくに強いとされる。

<sup>\*4</sup> たとえばシデ語では、刻まれた記号は 28 個、そのうち音価を確定できるのは 15 にすぎない (Brixhe 1969)。1970 年代に、前 3-2 世紀の碑文をふくむ 6 点の小碑文が発見された。リュキア語については後述する。

<sup>\*5</sup> Oxf. Hbk, 26, 605-608.

あれ、カリア語、リュディア語など他のアナトリア語派の諸言語についてもいいうことで、私たちは「トロイア方援軍の言葉」が、耳で聞くだけでもあきらかにギリシア語とは異なる響きをもつ言葉であったこと、互いの間でもそれぞれが異なる響きをもつ言語集団を形成していたことを推定できる。

## 1.2 現存するリュキア語史料

リュキア語の銘文史料は、<sup>インスクリプション</sup>コインの刻銘を除いて、基本となる二つの史料集成すなわち Ernest Kalinka の『小アジア碑文集成』第 1 巻 (siglum: TL) およびその後出土した史料の Günter Neumann による集成 (siglum: N) の 2 書に集められている<sup>\*6</sup>。リュキア地方から出土した史料は 200 点を少し超える点数であり<sup>\*7</sup>、古くても前 6 世紀後半から前 4 世紀後半までのもので、そのうちリュキア語のみのものが 172 点、リュキア語とギリシア語との 2 言語併用が 20 点、アラム語 (アケメネス朝ペルシアの公用語)、リュキア語、ギリシア語の 3 言語併用が 1 点、他にアラム語のみのものなどが数点である。これらの内容は、8 割以上が墓誌で、それ以外は公式文書と、統治者を讃える事蹟顕彰碑である。顕彰文は墓誌をも兼ねていて、主体はリュキア語でそこにギリシア語の韻文が挿入されている例がいくつかあり、ここではギリシア語が日常語のレベルを超えた「文語 *langue littéraire*」として使われていたと考えられる<sup>\*8</sup>。ペルシア帝国のサトラップ (太守) が出す行政上の条令などの公式文書ではアラム語が主体であるが、前 4 世紀中頃以降の行政や宗教関係の公文書にはギリシア語の例がでてくる。アケメネス朝ペルシア末期の混乱期に、リュキア地方が西隣のカリアのサトラップである Mausolos の支配下におかれた時期のものでは、かれのヘレニズム推進に伴って、ギリシア語が「行政語」としてリュキア語やアラム語と同等の位置に並んで使われるようになり、そして地方語であるリュキア語は、ペルシア帝国の終焉にともなってギリシア語に、次いでラテン語に、呑み込まれてゆく。

他のアナトリア諸語史料のなかで、ひとつリュキア語碑文に特徴的なことは、語または語群<sup>\*9</sup>を区切る印としてコロン : が使われていて、「分かち書き」に近い記法がとられていることである。しかし文の区切りは示されていないので、これをきめることが、品詞と

<sup>\*6</sup> Kalinka, E.; *Tituli Asiae Minoris [= TAM], Vol. I. Tituli Lyciae. Lingua Lycia conscripti*, Wien 1901; Neumann, G.; *Neufunde Lykischer Inschriften seit 1901 (Ergänzungsbände zu den Tituli Asiae Minoris Nr. 7)*, Wien 1979.

<sup>\*7</sup> トルコでは現在も各地で発掘調査がすすめられているので、これらの数字はおおよその目安である。

<sup>\*8</sup> Le Roy 1981/83, 222. 顕著な例としての「クサントスの碑文」については後述する。

<sup>\*9</sup> 1 例として、TL27 第 6-7 行では : tideimi : setideimi : と刻まれており、: tideimi : は 1 ブロックの中に 1 語 (「子に」の意) であるが、次のブロック : setideimi : は「そして」を意味する小詞 *se* が次にくる tideimi と共に 1 つの「語群」をなす。Neumann (1983, 138) はコロンで区切られた 1 ブロックを *Komplex* とよぶ。

語の意味の決定とともに必要となる。Neumann 1983, 138 によれば、コロンの区切られた語・語群 (Komplex) には約 1700 の異なる種類があるが、そのうちで意味の確定しているものは、人名地名等固有名詞もふくめてせいぜい 500 ということである。これには、史料の絶対数が少ないことに加えて、その大多数が定型的で多様性に乏しい墓誌であることが大きな原因と考えられよう。

リュキア語史料に使われている文字は、西ギリシア系アルファベット (音価 /kh/ の表記に  $\Psi$  を使う) を基にしたと考えられる 29 個の記号から成る。ただし「ダイヤモンド」と通称される  $\iota$  記号  $\diamond$  の音価は未定であり、字訳では  $q, \tau, \theta$  とされるがギリシア文字との対応は未確定という記号もある。また、大文字の K で字訳される記号 (音価は /kw/、/gw/ と推定される) および  $\chi$  (または  $x$  または  $kh$ ) で字訳される記号 (音価 /kh/) を、語彙集作成にさいして、ローマ字アルファベットに準じた配列の中でどの位置に置くか、は作成者によって異なっている。以下に代表的な glossary である Neumann 2007 *Glossar des Lykischen* [略号 GLyk] と Melchert 2004 *A Dictionary of the Lycian Language* の序論部分に示された字訳 (transliteration) 配列を記しておく (リュキア文字およびその推定される文字表については本稿末の印欧アナトリア諸語全般に関わる文献のリュキア語部分を参照されたい) :

Neumann, XIII: a ā b d e ē g h  $\chi$  i j k l m  $\acute{m}$  n  $\acute{n}$  p q r s t  $\tau$   $\theta$  u w z  $\diamond$  K

Melchert, ix: a ā b d e ē g h i j k K l m  $\acute{m}$  n  $\acute{n}$  p q r s t  $\tau$   $\theta$  u w x z  $\diamond$

また、ごく粗い言い方になるが、現存資料にみられるリュキア語の母音は a, e, i, u の 4 母音で (o を欠く)、それに鼻母音 ā, ē および音節を形成しうる  $\acute{m}$ ,  $\acute{n}$  そして半母音 j, w がある<sup>\*10</sup>。

## 2.1 二つの墓碑

個人の墓碑の例としてはまず、リュキア語とギリシア語併記で両語がほぼ完全に一対一の対応をしていることで有名なものがあげられる<sup>\*11</sup>。Limyra 出土の、前 5 世紀と推定される家型墳墓の墓誌 (TL117) で、1-5 行がリュキア語、5-8 行がギリシア語。「Parmna / Παρμένων の子 Siderija / Σιδάριος が、彼自身と妻と息子 Pubiele / Πυβιάλης とのためにこれを建てた」という内容で、ギリシア人 Σ. が、リュキア女性と結婚し、生まれた息子にはリュキア名をつけた、すなわち土地の共同体に根を下ろしたことを意味すると考えられている。

<sup>\*10</sup> Neumann GLyk では “m n  $\acute{n}$ ” となっているが、2 番目の m はあきらかに  $\acute{m}$  の誤植である。

<sup>\*11</sup> TL117 は本稿筆者未見。人名表記は Kalinka 1901 および Neumann GLyk の当該項目による。

第二の例はイスタンブールの考古学博物館で実見したもの (TL27) で、Düwer 出土、ヘレニズム期と推定されている。リュキア語のみが記されており、「*Meχisttēnē* (*Sχχulije* の子) が、自身と妻 *Merimawa* (*Petēnēni*- の子) および息子 *Sχχulije* のためにこれを建てた」(全 8 行) という内容である。四つの異なる人名 (うち祖父と孫息子とは同名) があるが、*Meχ-* は *Μεγασθήνης*\*<sup>12</sup>, *Sχχ-* は *Σκόλιος* なるギリシア名のリュキア語表記であり、妻 *Mer-* とその親 *Pet-* の名はリュキア名であると解されている\*<sup>13</sup>。ここで興味深いのは *tideimi* (子) なる語の適用範囲の問題で、この語は先述の TL117 では並記されたギリシア語 *υῖος* に対応していることから「息子」と解されたわけであるが、こちらの TL27 では「妻」の出自を記しているので、*tideimi* が指すのは「娘」のはずである。訳語としては Melchert は “son, child”、Neumann は “Kind, ἑγγονος” としていて\*<sup>14</sup>、「娘」を指す可能性についての特別な言及はない。この語 *tideimi* の語源 (\**dhei-* 「乳を飲ませる」) については、Neumann の当該項目及び Laroche 1979, 110 に詳しい。また、「*Petēnēni*- の子 *Merimawa*」にある *Petēnēni*- なる人名は、Neumann の *GLyk* によれば男性である\*<sup>15</sup> が、そうであれば、名乗る時に父 (方) の名でなく母 (方) の名を名乗るのはリュキア人特有の慣習である、というヘーロドトスの記述 (I.173.5) はここには当てはまらないことになる。

## 2.2 クサントスの<sup>デユナステース</sup>統治者顕彰碑文 (TL44) とレートー神殿跡出土の 3 言語併用の決議碑文 (N320)

この二つは現存するリュキア語碑文のなかでとくに有名なもので、今回の旅では両方とも実見することができた。前者は現存のリュキア語碑文としてはテキストが最も長く、後者はほぼ完全な形で残る 3 言語併用碑文である。二つは内容面でも研究史の点でも対照的なので、以下にその概略を並記する：

### Le pilier inscrit de Xanthos (TL 44)

### La stèle trilingue du Létôon (N320)

現所在：出土地クサントス遺跡、Roman Agora の Xanthos の南西 4km、Létôon (Leto,

\*<sup>12</sup> Neumann *GLyk* は *mexistte ne* と分離して読む説をとり、*Μέγιστος*, *Μεγίστης*, *Μήκιστος* の可能性も引いている。

\*<sup>13</sup> Melchert 2004.

\*<sup>14</sup> Neumann *GLyk* で *tideimi* の項目を調べて下さった京都大学大学院の齋藤有哉さんと、のちに同書の閲覧を可能に下さった同大学院図書館にお礼申し上げる。

\*<sup>15</sup> おそらく *nēni* 「兄弟」を第二要素とする合成名であろうという。Melchert 2004 は性別を記していない (なおリュキア語では、名詞の性については有性／有生か無性／無生かの区別のみがあって男女性の区別はない)。Hdt. の記述の史料的裏付けの有無や推定されるリュキア社会の形等々の検討は、本稿の扱う範囲を超える問題である。

北側。碑文上部断片等 1842 年以来 British Museum (Frieze 部分等 Istanbul Archaeol. Museum)。

**発見時期・発見者：**1838–1843 年 Ch. Fellows.

**発掘調査：**1881–1908 年：ウィーン考古学調査団 (O. Benndorf, E. Kalinka, Hula & alii)。二度の大戦間の中断などを経て 1950 年からフランス調査団 (P. Demargne, P. Devambez, H. Metzger & alii)。2001 年からカナダ調査団<sup>\*16</sup>。

**内容からの推定制作年代：**前 5 世紀末。

**現存石碑の形とサイズ：**ほぼ四角柱。ca. W170 x D162 x H400 (+ 基部 216 + frieze 67) cm. 4 面に刻字。

**言語と行数\*：**a 南面リュキア語 31 字 55 行；b 東面リュキア語 31 字 64 行；c 北面リュキア語 19 行＋ギリシア語 12 行＋ミリア語\*\* 41 字 34 行；d 西面ミリア語 32 字 71 行。  
文字は楷書体・隊列式 (στοιχηδόν)。

\* 行数は上部断片部分 (在 Brit. Mus.) も含む。

\*\* Milyan：「リュキア語 B」ともよばれる。

**内容：**リュキアの統治者<sup>デュナステース</sup> (δυνάστης) Xeriga (Khe-riga) / Γέργης (Gergis) の顕彰碑：一族 (父祖、兄弟、息子 Erbbina / Ἀρβίνας) の事蹟記述：5 世紀初期からペロポンネソス戦争末期まで (ca.485–405) にわたると推定。

Apollon Artemis の 3 神殿) 東側で出土。出土地の北西 Fethiye (古代の Telmessos) の博物館に展示。

1973 年 8 月 31 日。フランス考古学調査団 (H. Metzger, E. Laroche & alii)。1962 年来の発掘調査のなかで上記年月日に発見。1978 年来 Ch. Le Roy, J. Bousquet & alii. (1970 年代からフランスは調査をレートーオン周辺に限定)。

358 (Artaxerxès III) / 337 BC (Artax. IV). 年代の違いはアラム語文冒頭「Artaxerxes の第 1 年 Sywn の月」の解釈の違いによる。

直方体。ca. W57 x D30 x H135 cm. 3 面に刻字。

正面アラム語 27 行；左面リュキア語 26 字 41 行；右面ギリシア語 26 字 35 行。

文字は楷書体・隊列式 (στοιχηδόν)。

リュキアの太守<sup>サトラップ</sup> (σατράπης) Pige-sere / Πιξάδαρος (Pixodaros) のもとでの新しい祭祀の導入とそれに伴う諸規則を制定するクサントス市民とその近隣民の決議文。

<sup>\*16</sup> Baker-Thériault (Schuler 2007, 121–132) による、経緯と 2005 年現在の状況、実施方法についての報告がある。

レートーオンの 3 言語併用石柱 (N320) は 1973 年に発見された時、アラム語部分に僅かの欠損はあるものの、ほぼ完全な状態であった。しかも 3 言語併用で、リュキア語文とギリシア語文とはほぼ同じ長さと内容をもち、石柱の正面に刻まれたアラム語文は他の 2 言語文よりも短い。「Kaunos 王と Ἀρκεσιμᾶς」なる 2 (英雄) 神のための神官の任命と神殿／祭壇建造およびそれに伴う諸規則を記したもので、おそらく左面 (リュキア語) 右面 (ギリシア語) の碑文は土地の住民に向けて示され、正面のアラム語文はペルシア帝国中央政府に概要を報告する文面であろうと考えられている。前 4 世紀後半のリュキアに関する歴史宗教社会面での史料価値はいうまでもなく、既知の言語であるギリシア語文の併存に助けられて、リュキア語とその文字の解明 (音価の確定など) にも寄与するところは大きく、その意味でもこの碑文の発見は画期的なことであった。テキスト原文は発見の翌年に公表され、最終的な形では 1979 年の *Fouilles de Xanthos (FdX)* の第 VI 巻全体がこの碑文の記録にあてられている<sup>\*17</sup>。

一方、クサントスの碑 (TL44) は、基底部から高さ約 7m くらいの石柱は今もそのまま遺跡に建っているが、上部は発見された時すでに崩落していて、その崩落断片の多くは、碑文はロンドンの大英博物館、碑文の上部にあった浮彫りの装飾部分はイスタンブールの考古学博物館、と分散して現存している<sup>\*18</sup>。最初の発見時からすでにほぼ二百年を経ており、20 世紀初頭の Kalinka 1901 の碑文集成には、当時実見可能であった文字部分すべてが、拓本による復元図およびローマ字表記の字訳テキストとして掲載されている<sup>\*19</sup>。しかしその後、部分的な修正や新しい解釈は学会報告や研究論文の形で数多く出されてはいるものの、全体としての新しい校訂版ともいえるべきものは、今回調べ得たかぎりでは、まだ出ていないようである。上述したようにとくに語彙の点で意味未確定の hapax (あるいはそれに近い) 語が多いこともあるが<sup>\*20</sup>、このクサントスの碑では北 (c) 面の後半部分と西 (d) 面に「ミリア語 Milyan」(または「リュキア語 B」ともいう) 部分があって、他の南 (a) 面、東 (b) 面および c 面上部とほぼ同じ文字を用いているが、音価の点で問題を残しており、このことも解明の進展を遅らせる要因のひとつとなっている。

<sup>\*17</sup> H. Metzger, E. Laroche, A. Dupont-Sommer & M. Mayrhofer; *Fouilles de Xanthos (FdX)*, tome VI: *La Stèle Trilingue de Létôn*, Paris 1979; テキストは 29-185。なお、松本 1983, 98-103 に、3 言語テキスト (リュキア語とアラム語は字訳表記) とその邦訳がある。

<sup>\*18</sup> 発掘の歴史と詳しい記録は P. Demargne; *Fouilles de Xanthos (FdX)*, tome I: *Les piliers funéraires*, Paris 1958; その後の調査研究の成果は A. Bourgarel, H. Metzger, J. Bousquet; *FdX*, tome IX, 147-196: *Troisième Partie*, 1992 参照。

<sup>\*19</sup> E. Kalinka, *TAM* vol. I (上掲註 6), 40-44。

<sup>\*20</sup> リュキア語語彙解明の方法とその困難については、Neumann 1983 がこの碑文 (TL44) の b51-55 の 5 行を例にひいて詳しく説明している。そこで意味未確定とされた 3 語は、同著者 2007 の *GLyk* においても定訳語を与えられていない。

このような難点はあるものの、この建立当時は高さ 10m を超えていたと推定されるクサントスの石碑が前 5 世紀のペロポネネーソス戦争、とくにその末期におけるリュキアの沿岸地方の動きを（おそらくは統治者顕彰碑としての誇張もふくめて）伝えるものであることは、確かとみてよいであろう。碑面の文字をたどってギリシア語に比定されるリュキア語の名詞（主に人名・神名・地名などの固有名詞）とリュキア語本来の単語で既知のものとを組み合わせると、「まるで曇りガラスを通して見るように」<sup>\*21</sup>ではあるが、トゥーキューディデースの第 2 巻や第 8 巻に語られた出来事が、リュキア側から見たこととして記述されている、と読みとれるからである<sup>\*22</sup>。Kalinka 1901, 46 が同定した語のうちで Melchert 2004 あるいは Neumann 2007 によってもほぼ確定されたものをいくつか挙げると：a45 milasántra- (Μελήσανδρος); a55 humrχχα- (Ἀμόργης); b22, 23 trijeré (τριήρης); b27 ijánisi (Ἰώνες); b27, 64 sppartazi (Σπαρτιάται), atánazi (Ἀθηναῖοι); b59 ntarijeuse/i (Δαρειός); b59–60 ertaxssiraza- (Ἀρταξέρξης); c11, 14, 15 kizzaprnnā (Τισσαφέρνης)<sup>\*23</sup> などがある。ただし、その音価つまり耳で聞く響きについてみれば、ギリシア語と異なる語形をもつ χbide (Καῖνος)<sup>\*24</sup>、trm̄mis (Λύκια) などの場合はいうまでもないが、人名等のギリシア語と共通する単語でさえもギリシア語のそれ<sup>\*25</sup>とは隔たっていたことが推測できる。

石碑の主人公であるクサントスの統治者は、19 世紀以来 Kherēi / χerēi (TL44 a47, 48, b23 にみえる) とされていたが、Bousquet 1992 は碑の a 面冒頭第 1 行の復元、c 面のギリシア語韻文（後述）や、N320（レートーオンの 3 言語併用碑文）と同じ神域の周辺で出土した碑文断片の検討などから、Kheriga（ギリシア名 Γέργης。TL44 a[1], 10, c37, 50 にも出る）であると主張してこの一族の系譜を推定した（*FdX* tome IX, 167sq.）。しかし Neumann 2007 *GLyk* は、χerēi (Bousquet の字訳では Kherēi) については“PN [人名]。lyk. Dynast”としているが、χeriga (s.v. χariga) についてはこれがクサントス碑の主人公であるとは確定していない。長い文献リストは、これが研究者のあいだで未だに見解の一致していない問題のひとつであることを示しているが、本稿では、この主人公を「ケリガ：Kheriga / Γέργης」とする Bousquet の読みに従う。

<sup>\*21</sup> Bousquet, *FdX*, tome IX, 175.

<sup>\*22</sup> Melchert 1993 や Schürr 2007 は、碑の北面 TLc3–9 の数行は、411 年頃の Tissaphernes（リュディアのサトラップであった）のカウノス滞在、スパルターペルシア間に繰返された協定の締結など（『戦史』第 8 巻）においてこの地の統治者の果たした役割を伝えている、と推定している。

<sup>\*23</sup> ペルシアの将である彼の名は、ペルシア名を介して同定されている。

<sup>\*24</sup> この語は、レートーオンの 3 言語併用碑文 (N320) のギリシア語（第 7 行）とリュキア語（第 8 行）の対応から解明された。

<sup>\*25</sup> 当時のギリシア語の「耳で聞く響き」については *OCD*<sup>3</sup> s.v. Greek language; pronunciation, Greek に依拠する。



### 3.1 クサントス碑文 (TL44) c 面のギリシア語韻文

クサントスの石柱には、先述のように、北面の第 20 行から 31 行までギリシア語が刻まれている。行初の 1、2 文字が欠損しているところもあるが、12 行全体としては崩落を免れて、遺跡に建っている部分（のほぼ最上部）に属している。前後にそれぞれ 1 行分の空白がおかれて、その上のリュキア語部分とその下のミリア語部分とから明瞭に区別されている。文字を刻む石工も交代しているのであろうか。12 行のギリシア語テキストは、23 行と 24 行の行初欠損部分の復元以外では Kalinka 1901, 43 と Bousquet 1992, 147 との間に読みの違いがないので以下に Bousquet のテキストを、逐語的な邦訳とともに提示する：

[ʼE]ξ οὗ τ' Εὐρώπην [Α]σίας δίχᾳ πόν[τ]ος ἔνεμ[ε]ν, 20  
 [ο]ὐδὲς πω Λυκίων στήλην τοιάνδε ἀνέθηκ(ε)ν  
 [δ]ώδεκα θεοῖς ἀγορᾶς ἐν καθαρῶι τεμένει,  
 [ἐρ]γων καὶ πολέμου μνήμα τόδε ἀθάν(α)τον  
 [Γέ]ρ[γ]ις ὅδε Ἀρπάγο υἱὸς ἀριστεύσας τὰ ἅπαντα  
 [χε]ρσὶ πάλην Λυκίων τῶν τότ' ἐν ἡλικίαι, 25  
 [πο]λλὰς δὲ ἀκροπόλες σὺν Ἀθηναίαι πτολιπόρθωι  
 [π]έρσας, συγγενέσιν δῶκε μέρος βασιλέας.  
 Ὡν χάριν ἀθάνατοί οἱ ἀπεμν(ή)σαντο δικαίαν  
 ἐπτα δὲ ὀπλίτας κτεῖνεν ἐν ἡμέραι Ἀρκάδας ἄνδρας,  
 Ζηνὶ δὲ π(λ)εστα τρόπαια β(ρ)οτῶν ἔ[στ]ησεν ἀπάν(τ)ων, 30  
 καλλίστοις δ' ἔργοις Κα[.]ίκα γένος ἔστεφάνωσεν.

23 [ἐρ]γων Bousquet, [νικ]έων Kalinka; 24 [Γέ]ρ[γ]ις Bousquet, [Χη]ρεῖς (J. P. Six), ... ]s Kalinka. 31 Κα[σ]ίκα vel Κα[ζ]ίκα Bousquet, Κα[ρ]ίκα Kalinka.

海がエウローペーをアシアーから隔てて以来、|リュキア人のだれも、いまだこのような碑を奉獻したことはない、|アゴラの清浄なる神域の内に、12 神に、|戦いの勲功の、これなる不滅の記念碑を。|この [ゲ] ル [ギ] スはハルパゴスの子、すべてにおいて最強の者、|腕の力で、戦いにおいて (?), 当時の若いリュキア人のなかで、|町を滅ぼすアテーナイアーの神助によって多くの城市をば |破壊し、親族に王の領分を分ち与えた。|かれの武勇に、不死なる神々は正しく報いた。|かれはアルカディアの重装歩兵七名を一日のうちに倒し、|だれよりも数多い戦勝

碑をゼウス神に建立し、華々しい勲功の数々によって、K-一族に誉れの冠をもたらした。

この短詩は石碑の主人公の武勲を讃えるものであるから、第 24 行冒頭の「ハルパゴスの子」の名を何と読むか、末尾第 31 行 Ka[ ]ika の欠損 1 字をどう補うかによって主人公が変わることになるが、ここでは上述したように、「Harpagos の子 Kheriga / Γέργης」、「Kheziga (の一族)\*<sup>26</sup>」とする Bousquet の読みに従って「ゲルギス」として、この報告を先へすすめたい。当面の興味はこの短詩の作者の方に向けられるからである。

この TL44 の短詩には作者名が刻まれていないが、上述したレートーオン周辺（本稿 2.2）出土の断片からは、作者の存在を示す、あるいは推定させる記述が読みとれるという。以下にその調査報告（*FdX*, tome IX 1992, 147-188 とくに 155-166）に依拠して、作者問題に関する Bousquet の推定の概要を紹介する。

問題の断片はいづれもゲルギスの息子である Arbinas（アルビナス：リュキア名 Erbbina として TL44a25 および d53 にも出る）の頌徳文 3 点、したがって前 4 世紀初期に位置づけられるもので（Bousquet による A、B、C の番号を用いる）\*<sup>27</sup>、A と B はおそらくはアルビナスの像の台座であった部分の A 面と B 面に刻まれたものと考えられ、両面はギリシア語のみである\*<sup>28</sup>。A はギリシア語 19 行で冒頭の 3 行と各行行末以外はよく残っているが、B はローマ時代に再利用されたために断片化がすすんでいて、エレゲイア風の 34 行に復元されたが空白が多い。C は 1962 年に発見された断片で、アルビナスがアルテミス女神に奉献した建造物の基部の一部とみられ、右面にギリシア語 8 行、左面にリュキア語 2 行（N311）が残っている（*FdX*, tome IX, 150 に図示あり）。

短詩の作者という問題でとくに注目されるのは A と C である。A では、この像がかれ自身からの奉納であること、かれが一月でクサントス、ピナラ、テルメッソスの 3 市を征服したこと、賢者にふさわしいあらゆる技：弓、武勇、馬術に優れていたことなどをヘクサメトロス 17 行の本文で記してかれの偉業を讃えたあと、1 行あけて次に « Σύμμαχος Εὐμήδεος Πελλανεύς μάντις ἀ[μύμων] | δῶρον ἔτευξε ἐλεγῆια Ἀρβίνοι εὐσυνέ[τω]ς »。（「Eumedes の息子にして Pellana の人、非のうちどころなき占師 Symmachos が、Arbinas に献呈するため

\*<sup>26</sup> Kheziga (vel Khesiga) (ギリシア名 Κοσσίκας) の読みは、ヘーロドトスの伝える「クセルクセースの艦隊指揮官の一人でリュキアの人」(7.98) の人名 2 通りの読み方：Λύκιος Κυβερνίσκος Σίκα (codd., Hude, Stein): Λύκιος Κύβερνις Κοσσίκα (conj. Meyer, How-Wells, Legrand) のうちの後者を支持する根拠である (cf. Bousquet 1992, 174; Neumann *GLyK* s.v. xeziga)。

\*<sup>27</sup> これらの短詩は、さきに全文をひいた TL44 のギリシア語詩とともに、P.A. Hansen, ed.; *Carmina Epigraphica Graecae*, v. I (Berlin-New York 1983) に n° 177, v. II (1989) に n° 888 i-iii としても入っている。

\*<sup>28</sup> この台座の、他の 2 面にはリュキア語が残っており（*FdX*, tome IX, 181-187）、それぞれ N324, N325 として Neumann 1979 にも収録されている。

に、このエレゲイアを巧みな技で作成した」という、作者の出自、職業、名を示す署名 (sphragis) 2 行が、こちらはエレゲイアの詩形 (le distique élégiaque) で付加されている。トゥーキューディデース第 8 巻によれば、Pellana (ペレーネー) は、前 413 年冬にラケダイモン政府が同盟諸市に軍船の建造を割当てたとき、他市とともに船を供出しており (8.3)、そのペロポンネーソス船隊はミーレートスにある海軍基地に向かう途中でいったんリュキアの西、カリア地方のカウノスに入港している (8.39)。Bousquet は、A の作者すなわちシュンマコスがペレーネー出身であることに注目して、シュンマコスは『イーリアス』の従軍占師カルカースのように軍船に乗り組んでいたが、カウノス寄港のさいになんらかの事情で下船してそのままクサントスの統治者の館に行ったのではないかと推論する。そしてさらに、もうひとつの断片 C については、作者が若いアルピナスの勲功と姿形とを讃えたあとに、「Παιδοτρίβας ἐπ[...] | Δῶρ' ἐποίησε ΕΛ[...]» (「パイドトリベースがこの el [egeia を] Arbinas に献呈した」と記しているので、この短詩の作者は、名は出していないがアルピナスの体育教育係 (maître de gymnastique) であったと分かる、とする。

ここでさきのクサントスの碑 TL44 に戻れば、こちらはアルピナスの父ゲルギスの顕彰碑であるから建立年代は前 5 世紀末で、上記 ABC の 3 断片よりもいくらか古い。詩そのものの語彙や措辞については、ABC との共通点も多く、『イーリアス』の語句がそのまま、あるいは変形されてこれらの 4 点の詩に組み込まれている例は、Bousquet 1992, 164 に列挙されている。また、TL44c20 (クサントス碑の短詩冒頭) の 1 行が、Simonides (前 6–5 世紀) に擬せられて「エウリュメドーンの戦い<sup>\*29</sup>に斃れたアテナイ戦士たちに」向けたとされるエレゲイア詩の第 1 行とまったく同一であることは、19 世紀以来指摘され、また議論されてきたところである<sup>\*30</sup>。クサントス碑文の詩はヘクサメトロスとペンタメトロスとを、distichon で通さずにやや不規則に組み合わせた「エレゲイアふう」の形式<sup>\*31</sup>をとっており、語形の点でも、時に c21 TOIANΔE のようなドーリス方言形と c26 ΑΘΗΝΑΙΑΙ のようなアッティカ方言形が混在している。また表記の点でも、-ει (c29 ΚΤΕΙΝΕΝ) と -ε (c21 [Ο]ΥΔΕΣ, c30 Π(Λ)ΕΣΤΑ) や、-ου (c23 ΠΟΛΕΜΟΥ) と -ο (c24 ΑΡΠΑΓΟ) の両方が使われていたりする。これらの「ゆれ」は、単なる誤りというよりはおそらく当時の、つまり「ヘレニズム期のコイナー」が、韻文においても、徐々に形成され始めるその時代

<sup>\*29</sup> 前 469 年頃リュキアの東隣パンフュリア地方の海陸両方で行われ、デロス同盟軍がペルシア軍に勝利した戦い。

<sup>\*30</sup> Kalinka 1901, 47: 問題の詩は、ed. Th. Preger, *Inscriptiones Graecae metricae: ex scriptationibus praeter Anthologiam collectae*, Leipzig 1891, 213, No. 269 [Simonidis (142 Bgk.)] としてネット上でみられる。

<sup>\*31</sup> Bousquet 165 n. 13; ここでは文字による表記と実際の発音との関係の問題点にも言及している。また断片 A と B の韻律については 156–159 を、TL44 も含めた «dorisime» (Λητώι – Λατοῖ – Λατώ の混在など) については 163 n. 8 を参照。

のギリシア語の状況を反映しているのであろうという<sup>\*32</sup>。そして統治者を讃える内容の点ではホメーロスとくに『イーリアス』の英雄たちがよく意識されている。クサントスの大石柱の北面に刻まれた 12 行の詩やレートーオン周辺から出土した碑文断片からは、リュキアの統治者の館には、ギリシアの叙事詩や抒情詩をよく知っていて、その形式や措辞を借用しながら碑文の主人公の功績を讃え伝えるという目的に合わせた韻文をつくることのできる、おそらくギリシア出身の人々が、占師や教育係などとして統治者の側近くにいたことが読みとれるのである。館で歓待され、歌を披露しつつ土地の伝説に関わる情報を集めて創作に活かすのは、おそらくホメーロス自身の体験でもあったであろう<sup>\*33</sup>。また、現存する 5-4 世紀の碑文史料からの証言に加えて、ヘーロドトス (4.35) にはデーロス島に伝わる古い讃歌の作者として「Ὡλήν ἀνὴρ Λύκιος (リュキアの人 Olen)」への言及もある<sup>\*34</sup>。

### 3.2 韻文作者たちの言語環境

クサントスの碑文にかいま見られるこのような詩人たちの存在は、同時に、その聴衆の存在をも示唆するであろう。ギリシア語は、おそらくホメーロスの時代からアレクサンドロス大王の頃までのリュキア地方で、統治者一族とその周辺など教養ある人々の言葉とくに文語として、貿易商人、建築職人、石工などの職業上必要な言葉として、程度の差はあれよく知られた言葉だったであろうし、また役人であれば公用語のアラム語も必要であったはずである。土地のリュキア語しか話さない（必要としない）人々のいる一方で、それぞれ必要の度合いに応じてバイリンガルやマルチリンガルの人々も少なくなかったと考えられよう<sup>\*35</sup>。

このような多言語使用の状況は、すでに『イーリアス』においても設定されていると考えられる<sup>\*36</sup>。第 6 巻の、リュキアからの援軍を率いるグラウコスとアカイア方の勇将ディオメデースが名乗りあう場面 (I44-211) でグラウコスの語るところによれば、かれとその従兄弟にあたるサルペードンは、ギリシアとリュキア双方の血を引く者として登場

<sup>\*32</sup> Bousquet 163. もちろん詩の作者とそれを碑に刻む石工とは別人であろうから、両者間の伝達如何という推定困難な問題もありうる。

<sup>\*33</sup> 久保 2007, I-23; West 2011, I.2-3 節、とくにリュキアとの関連は 23. 小アジアの西南沿岸地方が、古代から今に至るまで、ホメーロス自身の出身地ないしは創作の拠点と考えられていることはいうまでもない。

<sup>\*34</sup> Olen について Pausanias (8.21.3, 9.27.2, 10.5.7) は「ヘクサメトロスで歌った最初の人」とする。

<sup>\*35</sup> 上掲註 8, Le Roy 1981/83, 222-223.

<sup>\*36</sup> この節で扱う、小アジアにおけるホメーロスをめぐるマルチリンガルな環境については、Bryce 2006 がアナトリア研究の側からホメーロスを扱って説得力をもつ考察をしている（とくに Ch. I, 7-28）。

している。自分の領地の農民や戦場の兵士と話す時<sup>\*37</sup>にはリュキア語、館の中やアカイアの将を相手にする時にはギリシア語という前提が、ごくあたりまえのこととして、ギリシア語を聴く聴衆に受けとられる、と作者は知っていたのであろう。ではトロイアの人々についてはどうか。歴史事実としてトロイアの人々が何語を話していたか、印欧バルカン語派のフリュギア語とかミュージア語であったかかもしれないが、これは未だ定説としての答えが出されていない問題である<sup>\*38</sup>。しかしホメーロスとしては、リュキアの場合と同様、少なくともプリアモス王をはじめとする館の一族とその周辺の人々は、土地の言葉<sup>\*39</sup>と並んでギリシア語も使う人々である、という設定で作っていると考えられる。ではギリシア本土で『イーリアス』を聴く人々についてはどうか。一般的には、トロイアとギリシアとは別の言葉である、という理解が基本にあったといえる。それは、ゴルギアスの「パラメデーアの弁明」(DK82.11a)の中で、トロイア方に内通したとして咎められたパラメデーアが、「ギリシア人である私がトロイア方に内通しようとするなら、通訳がいてこそ (ἀλλὰ μεθ' ἐρμηνέως) 言葉が通じる。しかし通訳を入れたら第三者が入ることになるのだから、内通など成り立ち得ない」という論法で無実の弁明をしていることから分かる。一方、伝クセノフォンの『アテナイ人の国制』には、アテナイ人は外国との接触が多く好奇心が強いので言葉もあちこちの言葉からあれこれと選んでまぜて使っている、との話があり (*Ath.* 2.8)、トゥーキューディデースには、北西ギリシアのアンフィロキア地方では、ギリシア語を「習得した」地域とそうでない非ギリシア語地域とが隣接している、とも記されている (2.68 および 2.80)。このように方言の違いに加えてギリシア語以外の言葉が使われているバイリンガルな地方は、ギリシア本土にもあった。こういう状況が短期間に生じたとは考えられないので、本土の聴衆についても、ホメーロスはやはりバイリンガル、マルチリンガルな言語環境を設定している、とみることができよう。

#### 4.1 ホメーロスにおける γλῶσσα の用例と『イーリアス』 4.438.

以上、『イーリアス』に歌われたトロイア方援軍の言葉のひとつとしてリュキア語をとりあげ、実見した碑文（前 5-4 世紀）を紹介して、概略ではあるが、リュキア語が、とく

<sup>\*37</sup> サルペードーンが兵士を激励する場面 (12.409-413)、かれがグラウコスに伝える、領民の言葉 (12.318-320) など。

<sup>\*38</sup> *Oxf. Hbk.*, 710-711.

<sup>\*39</sup> 『イーリアス』で女たちが戦場からつかのまの帰還をしたヘクトールを取り囲んで、身内である兵士たちの消息を尋ねる場面 (6.237-241)、ヘクトールが兵士に呼びかける場面 (12.440-441) など。なお、このようなバイリンガルの現代における典型的な 1 例として、各種の報道で見る Daw Aung San Suu Kyi が思ひ浮かぶ。

に語彙の点で印欧語系のなかでも特殊な位置を占める「アナトリア語派」のひとつであること、その文字が、ギリシアアルファベットを基にしてはいるがギリシア語にはない独自の「音」を表す文字ももっていること、そしてギリシア語が詩の言語としてリュキア語碑文の中に用いられている例をみてきた。碑文のリュキア語を、復元された音価をたよりに声に出して読んでみると、トロイアの平原に集まったリュキア勢のざわめきが、遠く微かではあるが、「実感」をおびて聞こえてくるように思うのは、誤りであろうか。このような印象を考察の基底に保ちながら、あらためて『イーリアス』を読んでみたい。とりあげるのは第4巻、トロイアの平原に両軍が集まり、整列して動き出したところの描写である。

*Il.* 4.436: ὥς Τρώων ἀλαλητὸς ἀνὰ στρατὸν εὐρὺν ὀρώρει, 「そのように [= 群がった雌羊の啼き声のように] トロイア勢の広い陣営に戦いの叫び声があがっていた。」につづく 2 行:

437: οὐ γὰρ πάντων ἦεν ὁμὸς θρόος οὐδ' ἴα γῆρυς,

438: ἀλλὰ γλῶσσ' ἐμέμικτο, πολύκλητοι δ' ἔσαν ἄνδρες.

ここは従来、「というのも皆がみな同じ言葉、一つの声を、もってるのでなく、| 方々から呼び寄せられた 兵<sup>つわもの</sup>らとて、言語が混じっていたからである、」(呉茂一訳)にみられるように、γλῶσσ' ἐμέμικτο の γλῶσσα を、それぞれ異なる言語集団から来た兵士たちがそれぞれの言語で声をあげた (それで言語が混じりあった)、と解されてきた。それに対して、『フィロロギカ』第3号所載の安西論文<sup>\*40</sup>では、「なぜなら、彼らすべての声は同じではなく、ひとつでもなかったからだ。| 発言は、混じりあったもので、男たちは多くの語りかけを受けていたからだ。」(p. 51) として γλῶσσα を「発言」とする訳を提案している。本稿筆者はこの提案に対して疑問をいだき、γλῶσσα は、個人の発話行為である「発言」(parole)ではなく、一言語共同体内の共通コードとしての「言葉」ないしは「言語」(langue)<sup>\*41</sup>と訳すべきではないかと考えるので、ここでホメーロスにおけるこの語の用例を検討しておきたいと思う。

ホメーロスには γλῶσσα の用例が単数複数あわせて 12 例あり、まずその半数にあたる 6 例は、解剖学的にみた、口中の一器官としての「舌」(*Il.* 5.74, 5.292, 17.618: 人間の場

<sup>\*40</sup> 安西眞「言語と人間の社会的集団——*Il.* 4.422–45 の理解をめぐる」 in 『フィロロギカ』III, 48–65. その 51–53 部分に限定しての疑問提出が、本稿のこの節である。glossa 理解の結論としては従来の説につくことになるので Cambridge 版注釈 (ed. G. S. Kirk 1985, ad *Il.* 437–8) など既存の研究に負うところは大きい。記述が煩雑に過ぎるのを恐れて、ここでそれらを一々とりあげて検討することは避ける。

<sup>\*41</sup> 人間の言語活動を、伝達のための潜在的な記号体系である「言語」langue と、その運用の結果である具体的な個々の「言／発話」parole とに分ける、F. de Saussure に基づく古典的な考え方による (*Cours de linguistique générale*, pub. par Ch. Bally et A. Sechehaye, éd. critique préparée par T. de Mauro, Paris 1973, 'Introduction', Ch. III–V). 邦訳: 小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店)。

合、*Il.* 16.161, *Od.* 3.332, 3.341: 動物の場合) を意味し、「言葉」とは全く無関係である。  
次に *γλῶσσα* を人間の発話を支える器官の一つとしてみた例は 3 例:

*Il.* 1.249: τοῦ καὶ ἀπὸ γλώσσης μέλιτος γλυκίων ῥέεν αὐδὴ. 「かれ (ネストール) の舌からは蜜より甘い声が流れた」

*Il.* 2.489: οὐδ' εἴ μοι δέκα μὲν γλῶσσαι, δέκα δὲ στόματ' εἶεν, 「たとい私に十枚の舌、十の口があろうとも」

*Il.* 20.248: στρεπτή δὲ γλῶσσ' ἐστὶ βροτῶν, πολέες δ' ἐνὶ μῦθοι | 249: παντοῖοι, ἐπέων δὲ πολὺς νομὸς ἔνθα καὶ ἔνθα. 「人間の舌はよく回るもの、中には様々な話がたくさんあって、言葉があちこちと (行交う) 牧場は広い」

これら 3 例はいずれも *γλῶσσα* をたんなる人体の一部としてではなく言葉を発する器官の一つとしてとらえている点で、最初にあげた 6 例にある「槍で舌の下を突き通す」や「生贄獣の舌を切る」などの「舌」の場合とは異なるが、この語によってさし示されているのはやはり「舌」であって「言葉」ではなく、「舌」としか訳せない。

*γλῶσσα* の 12 の用例中、当面の問題である *Il.* 4.438 をふくむ次の 3 例 (*Il.* 2.804, 4.438, *Od.* 19.175) のみが人間の「ことば」を指し、訳語として「ことば」／「言語」を当てることのできるものである:

*Il.* 2.803: πολλοὶ γὰρ κατὰ ἄστυ μέγα Πριάμου ἐπίκουροι,

804: ἄλλη δ' ἄλλων γλῶσσα πολυσπερέων ἀνθρώπων.

「プリアモスの大いなる都に在る援軍は数多い、| そして言葉は互いに異なっているのだ、広く散らばった男たちの (言葉は)。」

ここはゼウスの使者として来たイーリス女神がヘクトールに忠告するところで、トロイア方援軍は各地から集まっていて言葉も互いに異なるから、各指揮官 (ἐκαστος ἀνὴρ) が自分の配下の兵士に指示して領国ごとに整列させるように (κοσμησάμενος πολίτας)、との趣旨である (804–806)。この *γλῶσσα* はあきらかに各言語集団の「言語 *langue*」をさしている。また、『オデュッセイア』の例では:

*Od.* 19.174: ἐν δ' ἄνθρωποι | πολλοὶ ἀπειρέσιοι, καὶ ἐννήκοντα πόλεις.

175: ἄλλη δ' ἄλλων γλῶσσα μεμιγμένη, ἐν μὲν Ἀχαιοί,

「そこ [クレタ島] には数えきれぬほど多くの人々がいて、90 の町があった。| そして言葉は互いに混在していた。そこにはアカイア人も……」(このあとクレタ人、キュドーニア人、ドーリア人、ペラスギア人とつづく)。

語り手であるオデュッセウスは、クレタ島はギリシア各地からの人々が集まっているところで言葉も混じりあっていると言う。いろいろな方言（言語共同体成員間の共通コードである *langue*）の共存をさすと考えられる。

そして当面の問題である『イーリアス』第4巻にもどれば、

*Il.* 4.437: οὐ γὰρ πάντων ἦεν ὁμός θρόος οὐδ' ἴα γῆρυς,  
438: ἀλλὰ γλῶσσ' ἐμέμικτο, πολύκλητοι δ' ἔσαν ἄνδρες.

「かれら全員の喧噪は同一でなく呼び声も一つではなくて、| 言葉は混在しており、兵士たちは何度も呼ばれていたからである。」と、逐語的には訳せるであろう。この *γλῶσσ'* *ἐμέμικτο* (4.438) では *γλῶσσα μεμιγμένη* (*Od.* 19.175) と、同じ動詞 *μείγνυμι* を使っており、どちらも、さまざまな集団の言語が（ギリシア語のなかでの方言であれ<sup>\*42</sup>、地方あるいは領国ごとに異なる言語であれ）まじりあって聞こえてくる状況の描写と考えられるのである。また、*οὐδ' ἴα γῆρυς* の *γῆρυς* は語源的には一種の儀式的な特殊な「呼び声／叫び声」を意味するとされる<sup>\*43</sup> ので、これを上にひいた 2.804–806 の領国ごとに異なる言語でなされる隊長たちの呼びかけの声と解することもできよう。両軍が激突へと進むこの場面で、アカイア方は、それぞれの指揮をとる者は命令を発するが、それ以外は兵士全員が黙々と進む、これほどの大軍が、「胸の中に声 (*αὐδή*) をもっていないかのように」、隊長たちをおそれて、沈黙のうちに (428–431)。トロイア方は全員が異なる騒音をたて、指揮官の呼び声も一つではなく、異なる言語がいろいろみだれ、兵士たちは何度も呼ばれていた。

ホメーロスが、アカイア方の沈黙と規律にトロイア方の喧噪と混沌を対置しているのは明らかである。そしてかれが後者の騒音は *γλῶσσα* の違いからくる、というとき、それは各集団の「言語」[*langue*] の違いを意味しているのだとする伝統的な見解に、本稿筆者も従いたい。そして、*γλῶσσα* を兵士たち個々人の「発言」[*parole*] とする解釈に対しては、「発言」を指す語は、むしろ、先に引用した *Il.* 20.249 「言葉が行交う」の *ἔπος, ἔπεα* であろうと指摘したい。まだ網羅的に調べてはいないが、ヘクトールがイーリス女神の言葉をすぐ聞き分けるところで *ὥς ἔφαθ'· Ἐκτωρ δ' οὐτι θεᾶς ἔπος ἠγνοίησεν* (*Il.* 2.807) の例、またアキレウスの挑発に対してアイネイアースが「私を言葉で脅せると思うな」*μὴ δὲ μ' ἐπέεσσι γε νηπύτιον ὥς | ἔλπεο δειδίξεσθαι* (*Il.* 20.200–201) と答えるのもそれである。「発言」のもっとも顕著な例が、定型句 *ἔπεα πτερόεντα* 「翼もつ言葉」であることはいうまで

<sup>\*42</sup> R. B. Rutherford ed. (*Homer Odyssey Books xix and xx*, Cambridge 1992, 158) はこの箇所への註の中で、  
“..that different Greek dialects and non-Greek languages are mentioned together here, and that it is not clear how conscious the early Greeks were of the distinction.” という A. M. Davies の言葉を引用している。

<sup>\*43</sup> Chantraine, *DEG* s.v. *γῆρυς*: « terme noble et religieux ».



もない。

なお付加すると、ヘーシオドスには  $\gamma\lambda\omega\sigma\sigma\alpha$  が 5 例あるが、「怪物の黒ずんだ舌」(*Th.* 825) 以外はいずれも人間の、言葉を発するための器官としての「舌」である：「腕の力」に対比される「舌の力」(*Op.* 321–322)、「儉約好きの舌は最上の宝」(*Op.* 719)、「舌に甘い露を注ぐ」(*Th.* 83)、「舌の喜びのために偽りを言ってはならぬ」(*Op.* 719) の 4 例。そしてじっさいの「発話」のほうは、「口から蜜のような言葉 ( $\epsilon\pi\epsilon\alpha$ ) が流れる」(*Th.* 84)、「不愉快な言葉 ( $\epsilon\pi\sigma$ ) を吐いたら」(*Op.* 710) となっている。

また、この *Il.* 4.438 行では  $\text{πολύκλητοι δ' ἔσαν ἄνδρες}$  の  $\text{πολύκλητοι}$  の意味も問題であろう。従来はさきにひいた呉訳が端的に表しているように「方々から呼び寄せられた」とされていて、それに対する疑問と試訳「男たちは多くの語りかけを受けていたからだ」(p. 51)\*44 が安西論文によって出されている。本稿では「兵士たちは何度も呼ばれていたからである」と試訳してみた。「呼ぶ」のは指揮官たちであるという理解で、進軍中も騒ぎ立てたり（隊列を乱す者も出たり）という混乱の中で、各指揮官がそれを大声で制したり命令を繰返したりしている情景を想定するのであるが、確定はできていない。おそらく、この合成語  $\text{πολύκλητος}$  の難解な点は、とくに前半  $\text{πολυ-}$  の意味にあるのではないか。後半の  $\text{-κλητός}$  は  $\text{καλέω}$  から派生した形容詞で、 $\text{ἐκκλησία}$  « *assemblée du peuple (convoqué) à Athènes* » など多くの法律関連の語を生んでいることから、意味の中核は「名を呼んで呼び出す、召集する」とであるとされる (Chantraine *DEG* s.v.  $\text{καλέω}$ )\*45。しかし  $\text{πολυ-}$  については、 $\text{πολύς}$  が「多数の／しばしば起こる」に用いられることは既知であるが、例えば Frisk (*GEW* s.v.  $\text{καλέω}$ ) の記述 «  $\text{πολύ-κλητος}$  'vielgerufen', d.h. 'von vielen Orten herbeigerufen' » は、筆者には十分に説得的であるとはいいがたい、つまり「数多く呼ばれた」と「数多い場所から呼ばれた」とを等価とするのは無理ではないのかという疑問や、他に類例はあるのかという疑問は消えない。 $\text{πολυ-}$  + 過去分詞型（受動的）形容詞の例 ( $\text{πολυ-άρητος}$  <  $\text{-αράομαι}$ , *Il.* 19.404, *Od.* 6.280 など) を多数集めて詳しく検討する必要があると考えている。なおこの語について、本稿査読者の一人から、本稿筆者の文脈であれば、ここを「様々な言葉で呼びかけを受けていた」ととるのが妥当ではないか、という指摘がなされた。詩の状況としては、その通りであると思う。ただ、 $\text{πολυ-}$  なる語そのものの意味として、それが過去分詞型形容詞と結びついたときにも、量的な「多数性」に加えて（あるいは「多

\*44 「多くの語りかけ」は、戦意高揚のための神々からの激励 (439 行以下) をいう、と読む。本稿筆者は、*glossa* を「伝統的に」解しても、439–445 行をトロイア方の描写であるとする安西論文には抵触しない、と（きわめて楽天的に）考えている。

\*45  $\text{πολύ-κλητος}$  については « *applé de tout part*, dit des alliés des Troyens (*Il.* 4.438; 10.420). »

数性」よりもむしろ）質的な「多様性」を示す（逐語訳としては「多様に呼ばれる／多様な呼び方をされる」となる）ことができるのかどうか<sup>\*46</sup>、が筆者にはまだ納得できていないのである。

## 4.2 他のトロイア方援軍の言葉

リュキア勢は『イーリアス』のトロイア方ではもっともよく登場する援軍であるが、「援軍の言葉」を考えるなら、本稿ではできなかったが、他にもバルカン語派のフリュギア語やミューシア語も考察の対象にすべきであろうし、アナトリア語派でもカリア語や、リュディア語（*Il.* 2.864–866 でマイオーニア人とよばれる人々がその話し手であった）などの言葉も扱うことが必要であろう。アナトリア語派の諸語はいずれも、文字としては古い形のフェニキア・ギリシア文字アルファベットを基にしていながらそれぞれ特有の音価を推定される記号も少なからずもっており、リュディア語のように史料の大多数が右から左へという書字方向をみせるものもある。マルチリンガルな状況は沿岸地帯では共通していたであろうが、共存する言語間の隔たりは小さくなかったはずであるし、ギリシア語の一方言を母語とする人がリュキア語と接触した場合には、隔たりの感覚に大小の差はあれ「自分の言語とは違う言語」として（民族とか国とかの意識の有無とは関係なく）認識したであろう<sup>\*47</sup>。

そのような状況にあって、アナトリア諸語の中でもとくにカリア語は、リュキア語よりもさらに、ギリシア語からの隔たりが大きかったと思われる。カリア語は、以前から出されていた印欧語系アナトリア語派への帰属説が、Adiego による大部な研究成果の公刊（2007 年）を機に定説となりつつあるが<sup>\*48</sup>、文字の起源や音価<sup>\*49</sup>にも語彙にも未解明の点が多く残っている。史料の出土地が、エジプト<sup>\*50</sup>（約 220 点）、カリア地方（約 30

<sup>\*46</sup> “Even when translated ‘much’ in English, πολυ-terms, I think, almost always imply, especially in active compounds, variety; thus Achilles was ‘bold in various ways’..” (Stanford 1950, 109 n. 1, 下線本稿筆者) という指摘がある。

<sup>\*47</sup> よく指摘されることであるが (cf. 上掲註 42)、初等教育や新聞・テレビなどのメディアが普及していない時代では、方言と他言語との区別がどの程度意識されていたか疑問でもある。

<sup>\*48</sup> Adiego 2007, 4, 345–347. *Oxf. Hbk*, 710: « indubitably an Indo-European language » (Melchert 執筆)。

<sup>\*49</sup> Adiego 2007, 232–233 の « Uralphabet » リストには 31 種（変種を含めると 50 種を超える）文字記号があり、リュキア文字、リュディア文字などと同様、古いギリシア・アルファベットを基にしたものと推定されている。

<sup>\*50</sup> エジプトには、傭兵としてのカリア人や（イオーニア、ドーリス、ロードス地方などからの）ギリシア人が、前 7 世紀 Psammetichos I 世時代から常駐していた。また、外国語に巧みなカリア人の例として、リュディアのサトラップであった Tissaphernes が、スパルタへの使節として側近の一人でベルシア・ギリシア両語を操るカリア人 Gaulites を派遣した話 (Thuc. 8.85.2 および久保訳注 ad. loc.) もある。

点)、ギリシア本土(アテネとテッサロニキ各1点、いずれも小断片)<sup>\*51</sup>と広く、文字記号の数や形が時代と地方によって多くの変種をもつなど等質でなくて、内容(墓碑断片、グラフィッティ)の点でも短く多様性に欠けるなど難点が多いとされる。カリヤ地方からは、最近では1996年と97年にカウノス遺跡の港に近い場所で、2名のアテーナイ市民をproxenoiかつeuergetaiにするという、カウノスの民会決議碑文(ギリシア語との2言語併用で、推定年代322/314BC. Adiego 2007, 154–155. C.Ka5)が、連続する3個の断片の形で発見された。3個を合わせるとca. H71.5 x W21.0–28.5 x D8.5cm、上部がカリヤ語18行、下部がギリシア語8行から成る碑文で、本稿2.2節でとりあげたレートーオンの3言語併用碑文と同じくフェティエの博物館に展示されている。ドラマティックと形容したいような発掘の経過と碑文内容の解明はFrei-Marek 1997および1998に詳しい。

トロイア方援軍の言葉に関心をもつ立場からは、Adiego 2007, 203の対照表が興味深く、上述のカウノス碑文に出るギリシア語とカリヤ語(字訳)の対応例: *Kavvίους* – kbidn<sup>\*52</sup>, *Ἀθηναίων* – otonosn などからだけでも二つの言語の間の、耳に聞こえる違いが分かるように思われる。クサントス碑文 TL44 のリュキア語では、*Ἀθηναῖοι* – atānazi であったことを考えると、カリヤ語の話し手が発音する「アテネ人」は、リュキア語の場合よりもさらにギリシア語からは遠く隔たった音として聞こえたに違いない。ホメーロスが、小アジアのあちこちから集まったトロイア方援軍を描くにさいしてカリヤ人だけを *Καρῶν βαρβαροφώνων* (Il. 2.867) と形容したのは、イオーニア地方のギリシア語の響きに慣れた耳には、カリヤ語の響きがとくに「耳立つ」特徴をもって感じられたことを、聴衆に伝えたかったからかもしれない、と考えている<sup>\*53</sup>。

(成蹊大学)

## 参考文献

### 印欧アナトリア諸語全般：

1988–1996) 『世界言語大事典』 全6巻、三省堂(関係項目執筆：松本克己)。

1990) 大城光正・吉田和彦 『印欧アナトリア諸語概説』、大学書林。

<sup>\*51</sup> Adiego 2007, Chap. 3, 17–165.

<sup>\*52</sup> *Kavvίους* はリュキア語では *χbide* (上述2.2節、註24) である。

<sup>\*53</sup> *Oxf. Hbk.* 20 にみえる、詩人は沿岸旅行のさいに直接カリヤ語に接して、異なる言語集団であるとの認識をもったのであろう、という見解に同感である。古来多くの議論がなされてきた *barbarophonoi* の解釈問題には、ここでは立入らない。

- 1996) P. Daniels & W. Bright, ed.; *The World's Writing Systems*, Oxford. [日本語版『世界の文字大事典』(朝倉書店) 近刊予定].
- 2001) 『世界言語大事典／別巻：世界文字辞典』、三省堂 (関係項目執筆：松本克己).
- 2003) S. Hornblower & A. Spawforth, ed.; *The Oxford Classical Dictionary* (3rd ed. rev.).
- 2004) R. D. Woodard, ed.; *The Cambridge Encyclopedia of the World's Ancient Languages*, Cambridge.
- 2008) R. D. Woodard, ed.; *The Ancient Languages of Asia Minor*, Cambridge. [前書から小亜細関係を抜出したもの]
- 2011) S. R. Steadman, & G. McMahon, ed.; *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia 10,000 – 323 B.C.E.*, Oxford.

#### リュキア語：

- 1901) E. Kalinka; *Tituli Asiae Minoris*.. [= TAM], Vol. I. *Tituli Lyciae. Lingua Lycia conscripti*, Wien. [siglum TL]
- 1958) P. Demargne; *Fouilles de Xanthos (FdX) I: Les piliers funéraires*, Paris.
- 1965) S. Pembroke; Last of the Matriarchs. A Study in the Inscriptions of Lycia, in *Journal of the Economics and Social History of the Orient* VIII, 217–247.
- 1979) G. Neumann; *Neufunde Lykischer Inschriften seit 1901 (Ergänzungsbände zu den Tituli Asiae Minoris Nr. 7)*, Wien. [siglum N] [N = nova]
- 1979) H. Metzger, E. Laroche, A. Dupont-Sommer, M. Mayrhofer; *Fouilles de Xanthos (FdX) VI: La Stèle Trilingue de Létôon*, Paris.
- 1981/83) Chr. Le Roy; Aspects du plurilinguisme dans la Lycie antique, in *Festschrift Akurgal 2 in Anadolu [Anatolia] XXII* 1981/1983, (Ankara 1989), 217–226. <http://dergiler.ankara.edu.tr/dergiler/14/712/9000.pdf>
- 1983) G. Neumann; Zur Erschließung des Lykischen, in *Le lingue indoeuropee di frammentaria attestazione* (Atti del Convegno... 1981) Pisa, 135–151.
- 1983) 松本克己；クサントスのレートーオン出土の三言語併用碑文とリュキア語研究の現状——特にその統語構造を中心に——in 『オリエント』 26 (2) 1983, 95–118.
- 1985) 松本克己；印欧アナトリア語派におけるリュキア語の位置——特にリュキア語の複数主格及び属格語尾をめぐって——in 『京都産業大学言語科学研究所所報』 6 (2) 1985, 24–53.
- 1992) A. Bourgarel, H. Metzger, J. Bousquet; *Fouilles de Xanthos (FdX) IX: La région nord de Létôon*, Paris, vol. 1, 147–196: Troisième Partie.- Les inscriptions gréco-lyciennes.

- 1993) H. C. Melchert; A New Interpretation of Lines C 3 – 9 of the Xanthos Stele, in *Ergänzungsbände zu den Tituli Asiae Minoris* Nr. 17 (*Akten des II. Internationalen Lykien-Symposiums Wien 6.-12. Mai 1990*), Wien, 31–34. <http://www.linguistics.ucla.edu/people/Melchert/xanthosc3-9.pdf>
- 2004) H. C. Melchert; *A Dictionary of the Lycian Language*, Ann Arbor–New York.
- 2007) Ch. Schuler; Einführung: Zum Stand der griechischen Epigraphik in Lykien. Mit einer Bibliographie, in *Griechische Epigraphik in Lykien. Eine Zwischenbilanz. Ergänzungsbände zu den Tituli Asiae Minoris* Nr. 25 (*Akten des Int. Kolloquiums München, 24.-26. Feb. 2005*), Wien, 9–26.
- ibid.) D. Schürr; Formen der Akkulturation in Lykien: Griechisch-lykische Sprachbeziehungen, 27–40.
- ibid.) P. Baker–G. Thériault; Prospection épigraphique de Xanthos: bilan et méthodes, 121–132.
- 2007) G. Neumann; *Glossar des Lykischen* – Überarbeitet und zum Druck gebracht von Johann Tischler (*Dresdner Beiträge zur Hethitologie* 21), Wiesbaden. [GLyk]

#### カリヤ語：

- 1997) P. Frei–Ch. Marek; Die Karisch-Griechische Bilingue von Kaunos – Eine zweisprachige Staatsurkunde des 4. Jh.s v. Chr., in *Kadmos* (36) Berlin, 1–89.
- 1998) P. Frei–Ch. Marek; Die Karisch-Griechische Bilingue von Kaunos – Ein neues Textfragment, in *Kadmos* (37) Berlin, 1–18.
- 2007) I. J. Adiego; *The Carian Language*, Leiden–Boston.

#### シデ語：

- 1969) C. Brixhe; L'alphabet épichorique de Sidé, in *Kadmos* (8), Berlin, 54–84.

#### ホメーロス関係など：

- 1950) W. B. Stanford; Homer's Use of Personal πολυ- compounds. in *Classical Philology* (45), 108–110.
- 1968–1980) P. Chantraine; *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*, Paris. [DEG]
- 1970) R. Hope Simpson–J. F. Lazenby; *The Catalogue of the Ships in Homer's Iliad*, Oxford, 176–183.
- 1972–1973) HJ. Frisk; *Griechisches Etymologisches Wörterbuch*, 3 Bde, Heidelberg. [GEW]

- 2002) J. N. Adams, M. Janse & S. Swain ed.; *Bilingualism in Ancient Society – Language contact and the written word*, Oxford, repr. 2005.
- 2006) T. R. Bryce; *The Trojans and Their Neighbours*, London.
- 2007) 久保正彰; ヤコブス・ホイエル (1651–1689) とホメロス研究——「船のカタログ」を中心に——, in 『西洋古典学研究 LV』, 1–23.
- 2011) M. L. West; *The Making of the Iliad. Disquisition & Analytical Commentary*, Oxford.
- [本稿筆者未見] : 2005) H. Eichner; Neues zum lykischen Text der Stele von Xanthos (TL 44), in *The III<sup>rd</sup> International Symposium on Lycia, Antalya 07–10 November 2005 – Abstracts*, Dortluk Kayhan–Tarkan Kahya (eds.), 231–238. [以上]